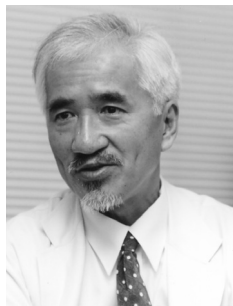


Haemophilia 日本語版 Supplement No. 1の編集に当たって



担当編集委員
三間屋純一
静岡県立こども病院血液腫瘍科長

今回 *Haemophilia* 第6巻 Supplement 1 の日本語翻訳を送らせていただきます。本文は21篇の論文が掲載されており、その内容は血友病治療の総説、治療ガイドライン、歯科、整形外科、保因者の止血管理、インヒビター管理、DDAVPによる止血療法、合併症としての肝炎対策、HIV感染治療薬、Creutzfeldt-Jakob病の問題および遺伝子治療と展望、さらには先天性XII因子欠乏症、血小板機能異常症について記されている。この特集記事を読破することにより血友病および類縁疾患など遺伝性出血性疾患の現状と問題点を理解することができるでしょう。

本来ならこれらすべての論文を全訳したものを掲載したいところですが、紙面の都合上4篇のみを紹介させていただきます。

第1篇は遺伝性血液凝固因子欠乏症の管理に関する Carol K. Kasper 博士の総説論文である。ご存知のように博士は本年カナダ・モントリオールでの第24回世界血友病連合 (WFH) 会議にて会長を務められ、講演をされておられます。また、われわれ日本の血友病専門医にも定期的に情報 (The Hemophilia Bulletin) を提供して下さっています。本論文を一読されることで血友病の病態およびその最新治療を知ることができるものと思われま。

第2篇は現在血友病患者の医療の中で、治療上また医療経済的にもっとも問題となっているインヒビターのガイドラインが示されています。わが国も本年から奈良県立医科大学 吉岡教授を委員長として免疫寛容導入療法 (ITI) の国際共同研究に参画することが決まっております。かつ遺伝子組換え活性型第VII因子製剤 (ノボセブン、ノボノルディスファーマ) が認可され使用例が増加している中で、改めてその適応、製剤の選択などを考える上で参考となるでしょう。

第3編は米国ジョージア州における血友病および von Willebrand 病の治療プロトコールが示されており、治療のスタンダードを提示し、同時に血友病包括医療の必要性を強調しています。

第4編は遺伝子治療の現状と問題点について将来展望が記載されています。遺伝子治療については倫理的な側面もあり、医療者と患者家族との共通理解が必須であることが強調されています。

日本語版の本特集が血友病患者を一人でも診ている医療機関ならびに患者家族会、できることなら全国の医科大学の図書館に配布されることを希望します。そのためにも今回掲載できなかった整形外科領域ならびに合併症に関する論文については、できるだけ次の機会に紹介したいと考えています。

今回紹介した4篇の全訳分に関しては静岡県立こども病院血液腫瘍科の堀越泰雄、寺島慶太諸氏との共訳であることを付記しておきます。